

週刊センターニュース No.312



第312号(2010年6月14日) 毎週月曜日発行
発行：金沢大学 大学教育開発・支援センター
URL：<http://www.rche-kanazawa-u.jp/>

○●○ 大学コンソーシアム石川主催 2010年度FD・SD研修会開催のご案内 ○●○ 第1回

テーマ：「発達障害学生への支援を考えるー日本学生支援機構作成DVDの紹介を中心にー」

日時：6月21日(月) 18時～20時

場所：石川県政記念しいのき迎賓館3階 セミナールームB(金沢市広坂2丁目1番1号)

講師：青野 透(金沢大学教授、大学教育開発・支援センター教育支援システム研究部門)

趣旨：独立行政法人日本学生支援機構(JASSO)の調査結果によれば、全大学等(短期大学、高等専門学校を含む)の中で、診断書の有無にかかわらず発達障害学生として支援・配慮を受けている学生がいる大学等の割合は、2008年時点で18.4%、四年制大学に限れば23.4%にのぼっている。大学等において、発達障害学生が入学する、あるいはすでに在籍するという前提のものに、支援の体制を整え対応することが必要となっている。

今回の研修会では、発達障害学生の現状を確認した後、JASSOが作成し3月に全ての大学等に送付した「障害学生支援教職員研修DVD」所収「障害学生理解(発達障害)」(約25分)を参加者と一緒に見る。その後、参加者との意見交換を行い、支援のあり方について検討を試みたい。

第2回

テーマ：「学生の質問力・主張力を伸ばすためにー100人ゼミの応用可能性を考えるー」

日時：7月5日(月) 18時～20時

場所：石川県政記念しいのき迎賓館3階 セミナールームB(金沢市広坂2丁目1番1号)

講師：橋本 勝(岡山大学教授、教育開発センターFD部門長)

趣旨：多人数授業を通じて学生の潜在力を無理なく引き出す橋本メソッド。『学生と変える大学教育ーFDを楽しむという発想ー』(ナカニシヤ出版、2009年)などで明らかにされ、科目の違いを超えて授業方法の改善のために貴重なヒントを与えるものとして注目されている。効果的なFDを求める高等教育関係者にご参加いただき、橋本メソッドの実際について議論を試みたい。

※参加申込：メールで、件名「第1回FD・SD研修会参加申込」又は「第2回FD・SD研修会参加申込」として、①機関名②所属③氏名をご記入のうえ、oono@ucon-i.jp(担当：大野)までお願いします。

○●○ 3 認証評価機関・日本学術会議共催第2回シンポジウム

「これからの大学教育の質保証のあり方-大学と評価機関の役割」参加報告 ○●○

大学評価・学位授与機構、大学基準協会、日本高等教育評価機構と日本学術会議共催により、「これからの大学教育の質保証のあり方-大学と評価機関の役割」という統一テーマの下、3回のシンポジ

ウムが開催され、うち5月15日(土)の第2回「大学側からみた質保証の課題」(会場:一橋記念講堂)に参加した。本センターニュース310号(2010年5月31日発行)でも取り上げられているが、大学教育に関連する学会・およびシンポジウムにおいて、一巡目の機関別認証評価について振り返り、二巡目に向けた質保証のあり方について、活発な議論が進められている。上記のシンポジウムでは、以下のように4氏からの報告があった。

1. 大学側からみた質保証の課題 山田勉(学校法人立命館総合企画部事業計画課長)
2. 質保証のこれからを考える 前田早苗(千葉大学普遍教育センター教授)
3. 大学側からみた質保証の課題 濱名篤(関西国際大学学長)
4. 大学の多様性と評価 北村隆行(京都大学大学院工学研究科教授、日本学術会議第3部会員)

二巡目の認証評価に向け、大学の質を自ら保証することのできる「内部質保証システム」を構築する必要があり(設置基準等法令要件の遵守が、必ずしも質の向上に結びつかないという反省から)、また教育課程修了が、質を保証した学位の授与と繋がるために、教育目的を明示し、その目的達成を図るカリキュラムと授業を整備し、客観的な評価システム(指標の開発も含め)により学習達成度を測っていくべきことが、大学基準協会をはじめ認証評価機関の評価基準の1つとして盛り込まれている(大学基準協会『大学評価ハンドブック 2011(平成23)年度申請大学用』4教育内容・方法・成果 教育目標、学位授与方針、教育課程の編成・実施方針(66~70頁)など)。こうした流れを受け、内部質保証システムを確立していく準備が各大学の喫緊の課題となつてこよう。

立命館大学では、①2009年に全学で報告書の作成を行い、大学評価部門と教学部門でコンプライアンス上の指摘を受け得る事項については是正を促すなど、自律的な是正機能の証明を図り、②10年度の学園ビジョンを前提に、大学を含む法人の新しい中期計画を検討し、各学部・研究科が行動計画を建てられるようにし、目的の明確化と事後的に検証可能な目標設定を行い、③根拠資料となる指標案の作成と「学習実態調査(学生調査)」を通じた学部の間接資料の収集に向け、職能横断的(部局横断)に取り組もうと試みているようである。

千葉大学においては、年度計画の進捗・実施状況に基づく自己点検評価(法人評価対応)に加えて、2008年から、大学情報データベースから15項目、部局から10項目の大学基本データを(企画政策課)収集し、部局別比較と経年変化などの分析(認証評価対応部会)を毎年実施し、また独自の評価基準とABCの3段階評価レベルを設定して、評価結果を各部局に提示して改善報告を求める場合もあるなど継続的に自己点検評価の実質化に努めているようである。前田氏の私見にもあったが、認証評価のための自己点検評価から、恒常的な自己点検評価の集約としての認証評価への転換の意義を再確認し、出来るところから始めて、着実に内部質保証システムを構築することが重要であると認識できる。

さらに濱名氏から、関西国際大学が認証評価を受けて、教職員の認証評価ないし自己評価に対する意識が高まったこと、大学の強みと課題が明確になり改善が進んだことが長所であったとみた上で、各部局の意義の理解度にばらつきがあること、定量的尺度と定性的尺度をどのように併用していくか、また学習目標に合った教育内容・方法、評価方法への還元が課題であると述べていた。教育・学習目標の設定については、その設定の仕方が何より重要で、学生目線の行動目標レベルまで考えていくべきであると述べており、傾聴に値すべきことであると思われる。

本学のCP、DP策定作業にとどまらず、個々の教員が金沢大学の独自性を踏まえながら、内部質保証の構築に向けて、積極的に関わっていくことが求められている。

(文責:評価システム研究部門 渡辺達雄)